

研修医とニュービートル・カブリオレ

新年度がスタートして、入社や転職、転勤などで生活環境が大きく変わった方も少なくないだろう。40代後半になると、友人の中には子供が大学を卒業して社会人になった者も何人かいる(さすがに孫ができたヤツはまだいない)。横浜市内で総合病院を開業している友人もそのひとりだ。娘さんが医大を卒業して、地方都市で研修医となったのである。幸運にも奥さんのDNAを受け継いだのだろう、彼の子供であることが信じられないほどの美人だ。

彼女は大学時代に2台のクルマを乗り継いできた。両車とも相談を受けた僕のチョイスである。

最初買ったのは、赤いボディの先代ジープ・チェロキー。100万円くらいで買える中古車の輸入SUVというのが希望だったから、このクルマを推薦した。50万円の頭金は親からの成人祝い、残りは36回のローンを組んで本人がアルバイトをして支払っていた。お世辞にも程度がいいとは言えなかったが、こまめにメンテナンスを施しながら大切に乘っていたようだ。ちょうど3年経った頃、購入時6万kmだったオドメーターを覗いてみたら、10万kmを超えていた。付き合っている彼の家が板橋区らしいから「なるほどね」と納得する走行距離だった。

それにしても、まったくクルマのことを知らなかった彼女の口から、ATのギアが滑るとか、ブレーキのキャリパーが云々という言葉が飛び出すようになるのだから、何事も経験に勝るものはない。

そして、卒業まであと数ヵ月という時、彼女に

おいしい話が舞い込んできた。オープンカーに買い換えるのなら、両親から150万円の援助金が出るというのだ。で、僕はVWのニュービートル・カブリオレを勧めた。見かけによらず、卓越した高速道路での安定性を持っているし、彼女の雰囲気に合っていると思ったのである。友人に、酒の席で例の150万円のことを聞いたのだが、なんのことはない、娘とオープンカーでドライブするのが夢だったから……、それだけだった。

で、今年の2月下旬。研修医となるために彼女はスカイブルーのニュービートル・カブリオレに乗り乗り立っていった。

それから2ヵ月半。いま唯一の楽しみになっているのは、当直明けに病院の駐車場で愛車を磨き、近くのコンビニまでソフトトップを開けて朝食を買いに行くこと、というメールが届いた。朝早くから、クルマを磨いている小児科の女医さんの姿ってちょっと怖い気もするけれど、内科医の父、外科医の母が購入代金の半分の援助してくれたニュービートル・カブリオレが心の支えになっているのだろう。というか、クルマに触れることで目標とする医者顔を思い出し、気合いを入れているのかもしれない。どんな職業でも志に勝る武器はない。

地方都市では小児科医不足が深刻化しているらしい。当直からそのまま一般外来を担当する32時間勤務も日常化しているという。一瞬たりとも気を抜けない職業。若いとはいえ、彼女の身体と心に蓄積される疲労とストレスは想像を絶するものがあるはずだ。

FROM UCG

野田義彦
YOSHIHIKO NODA

情報誌の編集部を経て、創刊準備号からUCGに加わり、第2特集のちょっと古いクルマを中心に担当。03年4月号からUCG編集長を務める。現在の愛車はランチア・テマ8.32。1959年生まれ。

若い頃の記憶を辿ると、父親である友人はMGBに乗っていた。そう、だから「オープンカーなら150万円出す」と言ったのだ。娘が早朝にクルマを走らせることが自分の経験から予測できたのかもしれない。僕に「娘とドライブしたいだけさ」と答えたのは、照れ隠しだったのである。ちなみに板橋の彼とは、遠距離恋愛が叶わず別れたそうだ。人生の転機に彼女の側に居合わせたニュービートル・カブリオレ。一生忘れられないクルマになるのだろう。

